第３回　ふくしま元気トーク　まとめ

【 開催概要 】

日　時	令和５年１月３１日（火） 午後１時３０分～３時
テーマ	福島らしい文化　ふくぶんを考える ～福島に生まれ育って本当によかった～
場　所	クーラクーリアンテサンパレス
出席者	（１）田村奈保子さん　（４）堀江格さん　（７）遠藤和奏さん （２）鈴木友和さん　（５）清野和也さん　（８）長田城治さん （３）阿部絵美子さん　（６）鈴木美佐子さん
（福島市）	木幡市長

１　市長あいさつ

コロナ禍になりまして、一段と困った現象が生じているのは、人口減少です。いかに地区の人口の減少を止め、人々の定着を図っていくか、あるいは若い人がよそからも集まってこられる町にできるかというのは、中長期的に非常に一番大きな課題になっています。その場合に、重要なのは、１つ目は、ずっと安全安心で暮らしていける地域であること、２つ目は、子育てと教育で選んでもらえる町になること、３つ目は、仕事があることという面での産業振興、そして、４つ目は、生活できる環境がそろっていても、楽しさとか、あるいは豊かさとかがなきゃいけないわけで、にぎわいと文化だというふうに思っております。

文化というのは、本当に一人一人の市民が楽しさも、あるいは豊かさも感じられることにもなりますし、地域振興の非常に大きな素材なんですね。福島、文化の香りは根づいている場所だというふうに思っています。特に、明治から大正、昭和の初期にかけては、非常に経済的に豊かなところで、そういった経済的な豊かさが、ある意味では文化を支えていて、高い文化振興が起こり、そんな基盤があったということですね。

今後、文化の振興を図っていく上では、やはり行政だけじゃなくて、市民の皆さん、あるいは文化活動を支える人たちも含めて合意形成も図っていく必要があるということで、文化振興条例というのもつくらせていただきました。そこでは、前文にも、福島の特徴とか、あるいはこれまでの福島の文化の歩み、特色などを書き入れて、そして、また一方では、我々としての反省も書き入れて、そういった思いをしっかりと土台にして、未来に向けて文化振興を図っていこうじゃないかと、それに対する施策の展開について規定をしているわけであります。その場合に、単に文化の振興といっても、縦割りの文化を単に振興するというわけじゃなくて、できる限りまちづくりとか観光とか、他のいろんな分野にも大いにこの文化が役立っていくような仕掛けを重視したいと思いましたし、それから、福島らしさって何なんだろうというのは、大事にしたいと思うんです。福島らしい特色って何なんだというのは、これからみんなで、その時代時代に、これまでの積み重ねも踏まえながら考えてやっていきたいなと思っています。

そうした中で、この元気トークで、文化をテーマに話をさせていただくことになりました。第一線で活動されている皆さんに集まっていただいて、これからの福島の文化振興の在り方、方向性を議論できたらなというふうに思っております。

２　主な発言内容

（１）田村奈保子さん（美術館とまちづくり研究会）

まず第１に、文化の価値とか流行とか知識とかは、この時代、日本全国、世界的な規模で同一というところがあると思うんです。先ほど、若者、ここにとどまる人を増やしたいということで、若者というお言葉が出たんですけれども、誰に向けてかということも非常に問題になってくると思います。文化には一般的にハイ・アート的なもの、高級芸術的なものもございますし、もっと柔らかく生活様式、流行の服を着たりとか、そういったものもあると思います。この後者のほうに走りますと、文化が消費の対象となってしまって、直接的で表面的な循環の中に陥ってしまう、これでは文化の向上につながらないというふうに日々考えております。

もう一つは、地域の文化力の向上は、個人の文化力の向上に支えられていくというふうに思います。美術館とまちづくり研究会では、コラッセふくしまの１階アトリウムで、福島地区の中学校の美術部の生徒さんたちの作品展をします。中学校の生徒さんの作品なので、プロではありませんけれども、その中学生の皆さんが、お互いの作品を見たり、自分の作品が展示されたり、おうちの方々が見にいらしたり。そうしたところで、一般の方もそれを見て、とても癒やされる、いいなと思う。生徒さんたちは、文化的な活動したということで、自信になったり、自分の時間をこうやって大事に使ったんだということになる。それが、教育的な意味にも、個人と心の問題でもとても大事なことだと思うんです。ハイ・アートに至らなくても、人の心を癒したりする。自分がそれをつくろうとする、つくったら見ようとする。そういったことで、個人の文化力が上がることが、地域の文化力を向上させられることになるのではないかと考えております。

（２）鈴木友和さん（Fukushima ad tower）

イベント関係、音楽関係にもよく参加しており、ここ数年は音楽文化の話ですと、町なかでイベントがたくさん開催されて、地元の方の発表の場も増えていて、すばらしい点だと思っております。ストリートピアノとかも置いてあり、音楽を身近に感じて、市民の皆さんがみんな身近に楽しめているのがいいと思います。

福島市にいながら夢が見れるような、実現する場も増えると、市民には輝ける場所が増えるのではないかと思っています。それに対するイベントの補助金とかはあるのかもしれないんですが、増えたらいいのかなと思っております。

ふくぶんプロジェクトは魅力的なものが多くて、フォトコンテストがいいと思います。ただ、ＰＲが弱いのかなと感じておりまして、ふくぶんの応募者の数が200件くらいしかなかったと思って、ユーチューブのほうやＳＮＳ等のＰＲをもっと強化すべきかなと思っております。

あと、若者重視型の参加型のイベントが増えると、皆さん、文化施設に来やすいのかと思っています。

（３）阿部絵美子さん（声楽家）

福島にいながらにしても音楽とか文化を楽しんで、学んで深めていけるようなものが、あるといいなと。それには、今日初めて会った方々多いですけれども、そういう方をつなげてくれるアートマネジメントとか、コーディネート、ハブとなる機関があったらいいなと思っています。

あと、演奏を聞きに来て与えられる感動とかありますけれども、福島はすごく広いので、中山間地でも聞けるような演奏もいいなと思ってもらえるような、子供でも大人でも演奏を深く楽しめるようなものがアウトリーチの活動としてもっと発展させていけたらいいなというふうに思いました。各学校との接点が少なく、こういった活動で貢献したくても接点がほぼありません。逆に、誰に講師派遣の相談すれば良いのかわからなかったという学校関係者の声を耳にしたこともあります。アートマネジメント等の機関で文化的な人材を掌握してコーディネートされていけば、地元にいながらにして、そして地元の先輩たちの姿から、ふくぶんをより身近に感じ、愛着をもっていくことが可能かと思います。

（４）堀江格さん（じょーもぴあ宮畑）

必ずしもほかと何か違う特別な物を準備するというのが文化ではなくて、街角に子供たちの絵が飾ってあるとか、ピアノが聞こえてくるとか、そういうところの経験の積み重ねが、たくさんの入口を開いてくれるのかなというふうに思っています。それが好きだから一歩を踏み出したら、もっと広い世界があるぞって分かってもらえる、そういう入り口をたくさん準備できれば、豊かな文化

につながっていくんだと。
　考古学、あるいは歴史や文化、そして伝統や郷土、そういったものに目を向けていくような、そういう仕掛けをいろんな形で、これが文化ですよという提供ではなくて、特に子供たちが、あるいは大人でも自分で発見できるような、そういうような仕組みというのは、やはり個人や小さい組織には無理なので、それこそマネジメントあるいはコーディネーターというものが一体的にたくさんの入口を準備するというのが、今後の文化を考えることで重要なんじゃないかなというふうに思っています。

（５）清野和也さん（劇団１２０〇ＥＮ）
　自分たちの地域が、「生まれ育って本当によかった」と、ここはほかと違うんだなというところを知るきっかけをつくるというのは大事かなと思います。これって面白いものなんだとか、ここにしかないものなんだということを知って、それをほかの人に伝えられるようにするということはその教育の場面だったり、文化の力ということでできるのかなと感じています。
　もう一つ、場の話というか、どこで上演するかということは、面白みでもあるんですけれども、例えば高校生がやってみたいと思ったときに、なかなかできる場所というのも探すところからだったり、利用料金の面があったりというのは、ネックになっているというのは聞いたりはしています。
　また　白河だったりいわきというのは、文化的にもすごくホールを中心に、コミネスさんだったりアリオスさんを中心に豊かな地域だと思うんですけれども、この芸術監督の方がホールにいて、これはトータルでプロデュースしているという面が強いんではないかなと思うんです。駅前のホール、そういう芸術監督、またアートマネジメントという面を、ホールを中心にしてつくっていくというところも、演劇だけじゃなくて音楽だったり絵画だったり、いろんな面でいろんな波及効果があるんではないかなと思っています。

（６）鈴木美佐子さん（民家園手織りの会）
　福島には歴史がありますよね。原点が養蚕から始まるんですけれども、絹の文化というのは、本当に全国的に注目されているんです。去年、ふくしま絹の道シンポジウムというのもしました。県内外の大体１００人くらいが集まってくださりました。私は現場でいろいろ講師をしたり、ツアーを組んだりとかしています。
　これから、いろいろやっていく上にあたって福島にある古い家を活用して、昔の生活的なものを文化として、福島の文化として進めていけたらいいと思います。

（７）遠藤和奏さん（生田流箏曲宮城社　妙祐会）
　演奏活動の傍ら、市内の小中学校で鑑賞教室ですとか、体験教室をしております。なじみがない箏というこの文化でも、少しでも小中学校のときに触れていますと、違う機会で触れたときに新たな発見があったり、楽しめたりすることがあると思います。
　今も体験教室などで、その場で楽しんで、披露の場がないことが少し残念だなと思っております。授業などで合唱などを学んだときに、福島は合唱コンクールがさかんですので、相乗効果で盛んになっているかと思います。お琴がそういう場がないから、もったいないなと思っております。邦楽の祭典という演奏会がございまして、いろいろな福島市の伝統文化をやっております。来場者に若い方がとても少ない点が残念でして、既存の事業を発展させて、市の事業で、体験教室などでお箏を少しでも体験した子たちが、そういう場で披露できたら、福島市の文化も豊かになっていけるかなかなと思っております。

（８）長田城治さん（福島市文化財保護審議会委員）
　文化というのはやはりお金でつくることができないものなのだとは思うんですが、お金で支えることができるものだと思うんです。なかなか市政でやっていくというふうに、文化ではお金にならないところだとは思うんですが、そこにしっかりとフォーカスしている福島市はすばらしいなと思いました。
　また、文化というのは、人であったり、そしてそこにある空間というのがすごく大事だと思っています。今まで、生産性とか合理性というのがすごく求められていた時代だったと思うんですけれ

ども、最近では連携であったり協働であったり、コミュニティーというのがすごく重要視しているような世の中に変わってきましたので、その中で文化は生活の指針になるのではないかなというふうに思っています。コミュニティープライド、協働に対する誇りを持とうという中で、ふくしまの旧家を活かす会というのがありまして、その方たちと登録有形文化財というものを使って、そのお家に対する誇りであったり、そしてそれを法的に国が認めたよということで、活動をさせていただいたりすることがあるんですが、福島市は、この登録有形文化財にノータッチで、市の市政に関わらないような民間の建物というのは、全て民間の力だけで今までやってきたところがあったので、旧家を活かす会の人たちにとっては、もっと市のバックアップをしてほしいというところが、お話は聞いていました。

市長　〇ＰＲはよく言われるんですけれども、本当に伝わるというのが大事、あるいは伝わって響くのが私も大事だと思っていつもやっているんですけれども、その辺は本当、多分どんなにうまい人でも永遠のテーマかなという感じもしております。

〇文化的な町って何だろうといったときに、本当に特別な展覧会でしか味わえない文化、町というのは、限定的なこの文化の浸透した町という形だと思うんですよね。できる限り町なかで、あるいは生活の中で文化を感じ取れるようにしたいなと思っていました。音楽であったり、あるいは絵画展であったり、何もない殺風景なものから、何かしら人の文化の営みが感じ取れるような場面を多くつくっていきたいなというのは、それもまさに文化のまちづくりなのかなと思っています。

〇文化は市政の柱の一つだと思って取り組んでおります。それは、地域の魅力をつくるためでもあるし、いわゆる文化もやっぱり使うことで初めて大事にするということになるんじゃないのかなと思っていて、それは、結果的にはお金にもなるんだろうと実は思っているんです。「しゃがむ土偶」というのものをテーマに、商品開発できないかということで、商品にして売ること自体が、その文化を皆さんに知ってもらって大事にしてもらう教育になるんだろうと思うんです。その点では、文化はもっと経済活動につなげていくというのを大事に思っています。

〇文化はお金で支えなきゃいけないんです。文化振興条例には、これまでの狭い目的の基金はあったんですけれども、それらを統合して、さらにいろんなものに使える文化振興基金というのをつくりました。
そうすると、必ずしも税金を使わなくても、そういう企業のご厚意を我々が受け取って、それがまた文化に投資をしていくということが可能になるという仕組みをつくっています。

【アートのある生活の提案、美術館と連携したクリエイティブなまちづくり】

〇田村奈保子さん

美術館とまちづくり研究会は、コロナ前は、軸は美術館との連携で、例えば町なかで美術講座をするとか、会場を美術館ではないアクセスのいいコラッセとかアオウゼというところでしてまいりました。活動と関連させて言わせていただくと、例えば中学生の美術部さんの発表の場が少ないということなんです。運動部の生徒さんたちは大会が必ずあるんですけれども、美術部の生徒はないということで、そういったところで作品展をしているんですけれども、とにかく子供のときから、そういうものに触れるということ、要するに教育ですよね。あと、美術だけではなくて音楽とか、いろいろな鑑賞教育ということを、子供のときから、そして日頃から、自然にそれらに触れられる環境。勝手に環境って言っても、福島市はたくさん彫刻が置いてあったりとか、展示があったりとかするんですけれども、それが１回見て、いいものだということを知って、それから見るのと、何となく置いてあるのとは違うというところがあります。
ですから、そういった教育とか、企画の部分ですね。それが、アート、文化に真面目に触れるという、変な言い方かもしれませんが、そういったことの素地をつくっていく。教育や市民生活の中に、なるべくそういった体験ができる場を増やしていくということが、文化を重要だと思うっていう、心の基礎体力をつくるというふうに思って活動しております。

【子どもの体験について】
〇遠藤和奏さん
　間口を広げて、子供のときからいろいろな文化に触れることによって、ある程度年齢がいったとき、また違う機会のときに触れたときに、「あ、これ知ってる」みたいな、そういうふうにちょっとしたきっかけで、その文化にさらに深く関わっていくというような、進路もありますので、そういう小さいときからいろいろな文化の種をまいておいて、あとは自分で興味を持ったものを楽しんでもらえたらいいなとは思っております。

〇堀江格さん
　子供たちは好奇心が旺盛なので、いろんなことに触れさせるというのがとても大事だと思うんです。思わぬものがあったりするので、発見することもあるし、自分に関係ないって思うものが、目の前に来たら、こんなに面白かったんだという気がつくこともあるし。
　ただ、押しつけない程度に、いろんな入り口が、それをわざわざ子供さんの場合、親御さんが連れて行かないと出会えないというのは、結構ハードルが高くて、ですから、町なかの本当にいろんなところにいろんなものが、いろんなきっかけがあるというのはとても大事なことだと思います。

〇阿部絵美子さん
　学校の教育の中とか、そういった放課後の活動とか、そういうところでちょっとずつ触れるようにさせてさせていっていただければ本当にいいと思います。
　音楽の分野であれば、本格的に学べるワークショップや夏期・春期マスタークラス。音楽堂に近年設立されたチェンバーオーケストラのメンバーから指導を受けるオーケストラ体験、また、本格的な発声指導を受けながら参加するオペラやミュージカル他合唱作品での体験は、非より良い文化体験となると思います。

【大人の文化体験について】
〇堀江格さん
　大人に対しては、ただ物が置いてある、ただ音楽が聞こえてくるだけではなくて、もう一歩踏み込んだ魅力というか、あ、そういうことなんだって分からせるような、理解を一歩深めさせるような仕掛けがあるといいと思います。

〇阿部絵美子さん
　学習センターですとかアオウゼですとかで歌わせていただくこともあるんですけれども、そういうときに、真面目な難しいオペラのアリアとか歌曲とかであっても、解説などを加えてから少しずつ深めていくと、いつもは「演歌しか聞かないから」みたいな人でも、私の歌を聞いたら「へえー」とか「ほー」とか言ってくださるんですよね。みんなでその場で体験できると、より大きな豊かさが得られるんじゃないかなって思っております。
　例えば各学習センター等での昼・夜の講座での参加・体験型のミニコンサートの他、ショッピングセンターや空き店舗、または駅前・街なか広場、四季の里等の屋外でのコンサートや体験フェスなど、型にはまらない場合へ私たちが赴き、市民の皆さんに豊かな文化体験を少しずつ重ねていただくことが実現すればと思います。

【開催場所について】
〇清野和也さん
　いろんな場所がすごくあって、そこをどう活用するかというのは、本当に面白さもあると思うんです。
　僕が脚本書かせていただくんですけれども、福島の風景というものをどこかに描こうとしていて、何かコンテンツをつくる、文化芸術をつくるというときにも、やっぱりこの町でしかないものって何だろうって常に考え続けなければいけないと思っているところです。

あと、写真館でイマーシブシアターといって、お客さんも移動しながらとか、もしよかったら和服で来てくださいね、大正時代のお話をやるので、一緒に体感型のお芝居をやりましょうねという作り方をしたんですけれども、海外の演劇、そういうのが最先端になっていて、本当にその場に行って、空間とか、福島という町をどう体感していくかというところが、これから大事になってくると思いますし、経済的に、この町を訪れるきっかけ、福島にしかないんだったら行ってみようかということにつながるんではないかなと常々思っているところです。

市長	○町なかで縄文に関しては美術館みたいな感じでやっていて、これはやっぱり結構皆さんやられるんですね。どちらかというと関心のある人もまず行っているんだろうと思うんですけれども、ただ、中には、ふと気づいて来るという人も、あるいは一緒にいて気づくとかいうのもあるし。いずれにしても、この間口を広げるというか、触れる機会を多くして、そのときに一緒に誰かがそこで一言でも教えてもらえると、また違ってくるのかもしれませんね。 ○パターン化しないで、できるだけ文化の町として機会はつくろうと思っているです。新年の市民交歓会ってあるんですね、年の初めに歌ってもらって、みんなで文化を感じながら元気出そうということにしているんですけれども、いろんな要素で、はめ込むというのは大事なのかなというふうに改めて思いました。 ○いろいろな施設を文化の場というのを使う、そういう風潮をつくっていく必要もあると思うんですよね。ちなみに、旧広瀬座は「場」として認識されるようになったし、近々改修入りますので、もっと発表の場としては使えるものです。

【文化とお金について】

○鈴木美佐子さん

お金にするというのは本当に大変なことですけれども、ヒットするには数多くいろいろ挑戦してみる。まず、福島には、ぜいたくな素材があるということ、作り手、若い人たちの感覚とか、そういうものを使ってヒット商品なんていうのは、可能性はすごくあるんですよね。今、サウナがブームで、サウナハットといって、内側がシルク、そして外側がこの羊毛といってやっていますけれども、チャンスはあるんだなということを、痛感しております。

あと、織物技術を継承していくというのもやっているんですけれども、やっぱりボランティアでは長く続かないんです。そういうことをやれば、多少なりともお金が入るということで、継承させるというような形でできればいいなということで思っております。

○長田城治さん

文化ということを根づかせていくためには、やはり教育の部分がすごく大事だとは思いますので、しっかりとそこの部分がある子供たちが育っていくことによって、それに対する価値があるなと思うと、大人になるとお金を払える、そこに興味を持っていくという仕組みが本当はいいのかなとは思っているところです。

イベントごとをやっているときには、人に話したくなるようなことをできるだけ伝えるようにして、子供たちをメインとしたとしても、一番の裏のターゲットは、その親世代、その中でのコミュニティーってすごく大事だと思っています。子供たちも楽しめて、実は親がすごく関心を持って、そこから別の人に、ママ友ですとか、そういうところにお話をできるような流れで、次、入ってくるかもしれないと。

○鈴木友和さん

福島市ロケツーリズムと文化と連携して、何か紹介だったりもできたら面白いのかなと感じておりました。

○遠藤和奏さん

福島市らしい特色、福島の文化ということで、県の話にもなるんですけれども、お箏でいうと、例えば「六段の調」をつくったのは、いわき市出身と言われております八橋検校、また、会津の桐が、お箏の素

材として使われている、それも有名で、プロの奏者の方も会津の桐をよく使っております。地域の産業とも今後うまくかかわっていけたらいいなと思ったりしています。

市長	○子供たちに大人が教わるというか、きっかけをもらうのも、確かにありますよね。そういった面は我々も感じていますので、うまく活用していきたいというふうに思います。 ○どこまでが文化でどこまでが観光かと、例えば花見山は、私、芸術だと思うんですよね。ただ、いろんな花をシリーズで結んで花観光にするとか。あるいは、浄楽園での何らかの芸術をまた観光に使うとかですね。あるいは盆栽の動画なんかも十何万回、１年だけで外国人中心に視聴されていますので、私自身は、特に典型的じゃない福島のある意味では文化というのが、すごくまた受けるのかなと思って見ています。 ○文化というのも、コストがかかるし、あるいはやっている方を、生活にしても支えないと続かないわけですよね。その点では、経済的な価値を認めるということも大事だと思っているんです。すばらしいものはすばらしいものとしてお金を出してもらえるような、こういう風潮にしないと、文化を支えることは難しくなってくるだろうというふうに思っております。また、できる限り自分たちで回れるような形を行政も一定の役割を果たしながらつくっていくことがまた発展の源なんじゃないかなと思っております。

【その他】
○長田城治さん
　今回、このような形で、いろんな専門の人たちがいますので、個人的にはこのつながりを生かして、文化を根づかせていくためには、この人が持っている知恵というのを、どのようにうまく使っていくかってすごく大事だと思っていますので、イベントがあったりというときに、皆さんとぜひ協力をできればいいなというふうに思いました。その枠組みというところを市のほうでつくっていただけると、よりいろんな芸術家であったり、活動をしていく人たちが、新たな知恵でコラボレーションができるような、この仕組みができていると、より文化が根づいていくきっかけになるんではないかなというふうに思っています。
　また、事業をやめるときとか、その継続したときの評価というのは、なかなか見えづらいところがありましたので、どういうことを今回この事業の評価をして、どういうところが駄目だったのかということを、ぜひしっかりと出していただければ、私たちのような者も、じゃ、どういうふうな仕組みでやったほうがいいとかということも考えられるきっかけになりますので、そういう点をぜひ検討して、しっかりと発信していただければうれしいなというふうに思ったところでした。

市長	○職員の説明力みたいなのになると思いますので、そこは本当に丁寧に、それから、あとやっぱり分かるように言わなきゃいけないと思うんで、相手に伝わる、あるいは響くということを重視して、これからもやっていきたいと思います。

３　まとめ

　文化の間口を広げる、あるいは、やはり何かにつけ文化の要素というものを取り入れて、それを皆さんに理解していただくということが、次の成長につながるというのが、皆さんの話を聞いた一番のポイントかなと思っています。それをもって、また、いろんな広がりあり、発展が出てくるんだろうと思いますので、そういった取組を、これから市のほうでも継続的に進めていきたいと思います。今日は、本当に皆さんお忙しい中、おいでいただきましてありがとうございました。

～開かれた市政へ～
ふくしま元気トーク